

## (1) 環境省公表「温暖化効果ガス排出量」

「環境エネルギーネットワーク 21」事務局

このたび、環境省より2013年度（平成25年度）日本の温室効果ガス排出量の算定結果が公表されました。下記にその概要を示します。詳細につきましては次のHPをご覧ください。

<http://www.env.go.jp/earth/ondanka/ghg/>

以下、環境省上記HP資料引用

2013年度（平成25年度）の温室効果ガス排出量（確報値<sup>（注1）</sup>）＜概要＞

- 2013年度の我が国の温室効果ガスの総排出量<sup>（注2）</sup>は、14億800万トン（二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）換算。以下同じ。）。
  - 前年度の総排出量（13億9,000万トン）と比べて、1.2%（1,700万トン）の増加。
  - 2005年度の総排出量（13億9,700万トン）と比べて、0.8%（1,100万トン）の増加。
  - 1990年度の総排出量（12億7,000万トン）と比べて、10.8%（1億3,800万トン）の増加。

## （参考）

- 前年度と比べて排出量が増加した要因としては、火力発電における石炭の消費量の増加や、業務その他部門における電力や石油製品の消費量の増加によりエネルギー起源CO<sub>2</sub>の排出量が増加したことなどが挙げられる。
- 2005年度と比べて排出量が増加した要因としては、オゾン層破壊物質からの代替に伴い冷媒分野からのハイドロフルオロカーボン類（HFCs）の排出量が増加したこと、火力発電の発電量の増加に伴う化石燃料消費量の増加によりエネルギー起源CO<sub>2</sub>の排出量が増加したことなどが挙げられる。
- 2013年度の京都議定書に基づく吸収源活動による吸収量<sup>（注3）</sup>は、6,100万トン（森林吸収源対策により5,200万トン、農地管理・牧草地管理・都市緑化活動により900万トン）。

注1 「確報値」とは、我が国の温室効果ガスの排出・吸収目録として気候変動に関する国際連合枠組条約（以下「条約」という。）事務局に正式に提出する値という意味である。今後、各種統計データの年報値の修正、算定方法の見直し等により、今回とりまとめた確報値が変更される場合がある。

注2 今回とりまとめた排出量は、条約の下で温室効果ガス排出・吸収目録の報告について定めたガイドラインに基づき、より正確に算定できるよう一部の算定方法について更なる見直しを行ったこと、2013年度速報値（2014年12月4日公表）の算定以降に利用可能となった各種統計等の年報値に基づき排出量の再計算を行ったことにより、2013年度速報値との間で差異が生じている。

注3 今回とりまとめた吸収量は、京都議定書第8回締約国会合の決定に従い、京都議定書に基づく吸収源活動による排出・吸収量を算定し、計上したものである。

## （2）家庭用ヒートポンプ給湯機購入動機・使用満足度調査

「エコキュート」は、空気中の熱エネルギーを集めて活用する省エネルギー技術「ヒートポンプ」を導入し、家庭で消費するエネルギーの約1/3を占める「給湯」分野において、大幅なエネルギー消費の抑制を可能にしました。2001年に世界で初めて商品化されて以来、昨年10月末現在で累計出荷台数が400万台を突破（約400万8千台）しました。

一般社団法人日本冷凍空調工業会は2013年に引き続き、エコキュートを購入した人を対象に購入動機と使用満足度の調査を実施しました。下記にその結果を引用して掲載いたします。詳細につきましては次のHPをご覧ください。

[https://www.jraia.or.jp/product/heatpump/i\\_enquete.html](https://www.jraia.or.jp/product/heatpump/i_enquete.html)

以下、一般社団法人日本冷凍空調工業会より引用

- 購入背景は「新築で付いてきた」人が22%であり、残り78%の人がエコキュートを意図して購入していた。2年前の調査も今回も約8割の人がエコキュートを自発的に購入していることが分かった。
- 購入のきっかけは「オール電化にしたから」61%、「販売店の勧め」21%、「故障・老朽化」16%の順に多かった。オール電化住宅にしたことが購入のきっかけとなった人は2年前も今回もほぼ6割であった。
- 購入の決め手は「光熱費が安くなる」57%、「オール電化にしたい」51%、「火の気がなく安心」29%が3大決め手であった。
- 購入後の満足度は「満足」40%、「やや満足」56%で、計96%の人が満足していると答えた。エコキュートに対する満足度は2年前に比べ大きな変化はなく引き続き非常に高いことが分かった。

- 非常時や災害時にエコキュートが役立つことについては、「停電時でもタンクのお湯が利用できる」ことを「知っている」人は半数以上の61%であった。「断水時に非常用水として利用できること」を「知っている」人は57%であった。「都市ガスと電気では電気の方が復旧が早かった」ことを「知っている」人は43%と半数を下回った。
- 家族人数とタンク容量の関係を調査したところ、少人数家族でも460Lや550Lといった大容量が選ばれるケースが多いことが分かった。